

大学初年次生の友達づくりに寄与するサッカー授業の試み

山本浩佑¹⁾, 窪田辰政²⁾

Trial soccer class for first-year undergraduates to make friends

Kosuke YAMAMOTO¹⁾, Tatsumasa KUBOTA²⁾

I. 緒言

厚生労働省が発表した将来推計人口の概要¹⁾によると、日本の人口は2070年まで減少し続ける予測がなされている。総務省統計局²⁾が発表した、令和4年に18歳を迎えた人の数は112万人と推計され、前年比で約2万人減となっており、学齢期の子どもも減少していくと予測とされている。文部科学省の令和5年度学校基本調査³⁾によると、大学・短大の数は合わせて1,110校となっており、大学の数は年々緩やかに増加してきている。また、現在日本の大学に在学する学生数は294万6千人と、少子化が進む中で過去最高の数字を記録している。昨年度の大学（短大含む）への進学率においても60.4%と過去最高の数字を記録しており、大学へ進学する学生の割合は増加してきている。しかし人口の将来予測を合わせて考えると、大学に進学する学生数自体は近い将来で頭打ちになり、減少に転じていくことが予測される。そのような状況では、大学側における学生数の確保

や人材の輩出に関する争いが激化し、経営的に困難に陥る大学が出てくることも想像に難くない。

大学は学問を修めるだけでなく、社会で活躍するための経験の集積や精神的準備段階という点においても大きな役割を果たしていると考えられる。一方、大学の中退率を見ると2021年度は1.95%となっており、中退理由の内訳では学生生活への不適應や学習意欲の低下といった、学生生活自体に意欲的になれない様子が窺える内容が転学等に次いで上位となっている³⁾。したがって学生生活に順応し、意欲的に日々を過ごすことができるかどうか、大学での学びを強化し、卒業後の社会生活に好影響を与える要素の1つとなっていると考えられる。

山田（2006）は、大きな環境の変化がある大学入学直後の適應状況に問題があると、不登校や休学、退学へと繋がっていくことを指摘している。逆に言えば、入学初期に滞りなく大学生生活に順応することが、その後の大学生生活において非常に大切であると言える。大学への適應感

1) 一般社団法人アスクラロススポーツクラブ
azul claro sports club

2) 静岡県立大学
University of Shizuoka

に影響を与える要素としては、大久保ら（2003）が環境への適合性の視点から適応感の尺度の作成を行ない、その結果示された因子には周囲との関係性に関する内容が多い。これらの先行研究から、大学生生活に順応し学問の探究や社会へ出ていくための準備などにおいて大学生生活を有意義に過ごしていくためには、大学入学直後において周囲の人間との関係性を良好にし、在籍する大学を居心地の良い場所であると感じられることが1つの重要な要素であると考えられる。そこで今回は、入学初年度となる大学1年生を対象として、チームスポーツを扱う体育の講義の中で学生同士のコミュニケーションを促したりグループでの活動を実施したりすることが人間関係の構築や友達づくりに寄与するかどうかの試みをサッカーの時間を活用して実践した。

II. 方法

1. 調査対象と方法

県立A大学で2学部の1年生を対象に開講されている「身体運動科学A」（以下、「本授業」とする）を受講する学生27名（男性11名、女性16名：平均年齢18.2歳）を対象に実技授業を8コマ（90分／コマ）行い、最終日に質問紙調査（有効解答率100%）にてデータを収集した。実技授業は、2023年4月中旬から6月下旬の期間で行った。質問紙は、対象者の属性、仲間づくりに関する項目⁶⁾、サッカーの技能向上や楽しさに関する項目で構成した。

2. 倫理的配慮

被験者となる受講生に対して、研究に関する趣旨の説明、講義の効果を計測するため質問紙調査の協力を求めること、匿名化した数量データ・質的記述のみを使用し、個人を特定する情報は一切公表しないこと、研究不同意は不利益を被らないことを初回授業の前に口頭で説明し、同意を得た学生から回答を得た。

3. 本授業の概要

本授業の学習目標は、「運動を通して得られる恩恵について知り、運動に対する意欲的な態度を獲得すること」および、「自己体力の現状も認識することで、生涯、健康で有意義な生活を送られるよう、各々の状況に即した適切な運動方法を習得する」ことである。通年で屋外スポーツ2種目、屋内スポーツ2種目の計4種目のスポーツを実施する。

4. 授業の構成

質問紙調査を行うまでに、本授業では全8回の実技授業を行った。実技授業では、チームスポーツのサッカーを教材として用い、コミュニケーションが増えるような内容の設定、声かけを意識的に行った。全8回の実技授業の内容を表1に示した。

本研究の対象となった大学では、運動を得意とする学生は多くなく、足でボールを扱うサッカーは高度な技術を要するイメージがあることが予測され、敬遠する学生もいる可能性があることを前提に授業の構成を行った。本授業全体を通して、スモールステップアップを意識して技術的な練習を行いながら、コミュニケーションを促すルール設定や声かけを行なった。毎回授業の最後には試合を実施し、その日ごとにチームを分け、各チームでコミュニケーションを図るようにした。技術の習熟やサッカーへの慣れと共に試合のコートの大きさや人数を増やしていき、授業が進むにつれて運動負荷が漸増し、よりダイナミックにサッカーができるよう全体を構成した。最初の2回の授業では、コミュニケーションが生まれやすくするために受講生同士が互いの名前を覚えることに注力し、アイスブレイクなどを行った。初回の授業では、全員が歩いてかつ身体接触なくプレーをするウォーキングフットボールを実施し、足の速さ、体の強さといった個人の運動能力の差を排除した中で全員が楽しめるようなルール設定のもと試合を行った。

2回目の授業では、ウォーキングフットボールと同じ設定のコートや人数で通常のサッカーを行った。3回目以降の授業では、技術習得を目的としたメニューも入れながら、コミュニケーションをとれる要素を入れ込んで全体を進行した。直接的なプレーでの関与でなくとも、「順番待ちをしている人が指示を出す」と有利になる」などコミュニケーションの動機付けになるようなルール設定を常に行った。

Ⅲ. 結果

1. 仲間づくりに関する効果

各質問項目に対して、非常に当てはまるを7点、全く当てはまらないを1点として被験者の回答を数値化した。さらにそれらの平均値、標準偏差、最小値、最大値を算出し表2に示した。すべての項目で平均点は5点を超え、解答のばらつきも小さかった。

表1 授業の実施内容

日付	回	内容	コーチング・コミュニケーション要素
4月17日	1	・アイスブレイク ・ボールフィーリング(手・足) ・ウォーキングフットボール(6人vs6人)	お互いの名前を覚える 誰もが楽しめるルール設定と難易度 試合時のゴールパフォーマンスはチーム全員で
4月24日	2	・ボール運びゲーム ・ドリブル練習 ・試合(6人vs6人)	お互いの名前を覚える 誰もが楽しめるルール設定と難易度 試合時のゴールパフォーマンスはチーム全員で
5月1日	3	・キック練習 ・ドリブル練習 ・試合(7人vs7人)	ゴールを設定するなどゲーム感覚でキックの技術練習 ドリブルはターンと突破を意識
5月8日	4	・パス練習 ・1vs1 ・試合(7人vs7人)	ドリブルとキックを組み合わせて動きながらパス ボール非保持者はボール保持者を助ける意識を持つ 1vs1で突破とキープを実施
5月22日	5	・ボール回し(手・足)4人vs1人 5人vs1人 4人vs2人 6人vs2人 ・パス練習 ・試合(9人vs9人)	ボール非保持者のサポートの重要性を説明 動くだけでなく声かけ(コーチング)のサポートも重要
5月29日	6	・ボール回し ・3人vs3人ミニゲーム ・試合(9人vs9人)	ミニゲームはコート中央にゴールを背合わせで設置 プレーしていない学生がコーチングで参加できるようにする
6月5日	7	・空きマーカー鬼ごっこ ・パス練習&ボール回し ・試合(男子:6人vs6人 女子:8人vs8人)	鬼ごっこは空きマーカーをタッチするルール 鬼ごっこでチームごと作戦会議の時間を設定 パス練習は人が横切る局面を作り見ることを意識づけ
6月26日	8	・空きマーカー鬼ごっこ ・チーム練習 ・試合(9人vs9人)	チームごとに練習や作戦会議の時間を設定

表2 仲間づくりに関する項目の解答結果

質問項目	平均値	標準偏差	最小値	最大値
友人が増えた	6.1	1.2	2	7
他人とのコミュニケーションの量が増えた	6.1	1.2	3	7
信頼できる他人が増えた	5.6	1.7	1	7
講義と一緒に受講する仲間を身近に感じられるようになった	6.3	1.3	2	7

次に、回答において5～7と回答した者を上位群、1～4と回答した者を下位群としてその分布を表3に示した。全ての項目において上位群の割合が80%を超える結果となった。

IV. 考察

今回は、入学初年度となる大学1年生が受講する講義における、サッカーの授業を活用して人間関係の構築や友達づくりを目指す取り組みを実施した。担当指導員としての印象は、初回の実技授業の際は入学して間もないこともあり、数人のグループが多数存在し、集団の中でいろいろな人とコミュニケーションを取ることでできる関係性はあまり感じられなかった。しかし本授業の中で、受講生同士が互いに名前を覚えたり、同じチームでサッカーを行なっていくことが、学部や性別の垣根を越えた友人関係の広がりにつながったように窺えた。今回質問紙で回答を求めた項目については、友人関係があまり広がっていない入学初年度に調査を行ったため、プラスにはたらきやすい要因であったと推察されるが、9割近い学生が前向きな感想を持っていることが明らかになり、本授業による効果も大きかったものと考えられる。大学で行われる講義の多くは、他学生とのコミュニケーションの機会が少なく、あるとしても少人数のグループ内に限定されたものになっていると感じられる。一方体育系の講義では、座学で行うグループワークなどに比べて規模の大きいグ

ループを構成したり、毎回チームを変えたりして授業を行うなど、受講生全員とチームの間としてコミュニケーションを取りながら活動できる機会が多くなる。またチームスポーツを行う際に、プレーの中で互いに助け合ったり支え合う経験をすることで、学生間の関係性は強化されることが考えられる。

体育の授業では、高等学校の学習指導要領などに記載されているように、知識や技術要素の向上やスポーツを楽しむことのできる素養を養うことが大きな目的として挙げられている。今回筆者が取り組んだ授業では、技術の向上やスポーツを楽しむといった点において受講生に質問紙で回答を求めたところ、表4のような結果となった。1から7の7段階で回答を求め、5以上を上位群とし、4以下を下位群とすると、ボールを止める、蹴るの基本技術については80%以上の学生が向上を感じている上位群となった。仲間と協力する、試合を楽しむという点では、90%以上の学生が効果を感じていた。この結果から、概ね技術向上やスポーツを楽しむ点においても、受講生は好印象を持っていることが窺えた。

西田ら(2009)は、大学の体育の授業で学生が感じる主観的恩恵の1つに「共同プレーの価値理解とコミュニケーション能力の向上」があるとし、これが高まるほど大学への適応感の尺度の1つである「居心地の良さの感覚」が高まることを示している。本授業においても、結果

表3 仲間づくりに関する項目の上位群・下位群の分布

質問項目	分類	n	%
友人が増えた	上位群	24	88.9%
	下位群	3	11.1%
他人とのコミュニケーションの量が増えた	上位群	24	88.9%
	下位群	3	11.1%
信頼できる他人が増えた	上位群	22	81.5%
	下位群	5	18.5%
講義と一緒に受講する仲間を身近に感じられるようになった	上位群	23	85.2%
	下位群	4	14.8%

表4 技能・楽しみに関する項目の解答結果

質問項目	分類	n	%
ボールを蹴る技能が向上した	上位群	24	88.9%
	下位群	3	11.1%
ボールを止める技能が向上した	上位群	22	81.5%
	下位群	5	18.5%
ボールをドリブルする技能が向上した	上位群	18	66.7%
	下位群	9	33.3%
仲間と協力してプレーできるようになった	上位群	25	92.6%
	下位群	2	7.4%
試合を楽しめるようになった	上位群	25	92.6%
	下位群	2	7.4%

として友人が増えたり仲間と協力してプレーできるようになったと感じられている学生が多いことから、本授業が学生たちの大学への適応にポジティブな効果をもたらすことができたと考えている。

大学での体育系講義は、その後の学生生活の安定を目的として友達づくりを促すなど、競技種目の技術習得だけにとらわれない広い視点を持った取り組みが可能であり、学生や大学にとって、非常に有益な時間を提供できるものであると考えられる。

今回は、授業実施後の質問紙調査の回答のみをもって授業の取り組みを横断的に評価した。この調査だけでは、本授業実施前後の比較や、進行中の変化等は測り知ることはできなかった。今後は介入群とコントロール群の比較や、縦断的な調査をもって今回の取り組みの成果をより詳細に明らかにしていく必要があると考える。

V. 謝辞

今回、県立A大学より非常勤講師としてお招きいただき、大変貴重な機会を与えていただきました。記して感謝の意を表すとともに、今後も微力ながら大学教育や地域への貢献に努めてまいりたいと考えております。

参考文献

- 厚生労働省：将来推計人口（令和5年推計）の概要，<https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/001093650.pdf>, 2023.10.29.
- 総務省統計局：統計トピックス No.134「卯年生まれ」と「新成人」の人口－令和5年新年にちなんで－，<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/topics/pdf/topics134.pdf>, 2023.10.29.
- 文部科学省：令和5年度学校基本調査の公表について，https://www.mext.go.jp/content/20230823-mxt_chousa01-000031377_001.pdf, 2023.10.29.
- 山田ゆかり：大学新入生における適応感の検討，名古屋文理大学紀要，6，29-36，2006.
- 大久保智生，青柳 肇：大学生用適応感尺度作成の試み－個人－環境の適合性の視点から－，パーソナリティ研究，12，38-39，2003.
- 芳賀道匡，高野慶輔，羽生和紀，坂本真士：大学生生活における主観的ソーシャル・キャピタル尺度の開発，教育心理学研究，65，77-90，2017.
- 西田順一，橋本公夫，木内敦詞，堤 俊彦，山本浩二，谷本英彰：体育授業における大学生の主観的恩恵評価およびその大学適応感に及ぼす影響性，体育学研究，61，537-554，2016.